

中部の

エネルギーを
築いた

人々

静岡電灯・名古屋電気鉄道・飛騨電灯
創設に貢献した技師 小木虎次郎

小木虎次郎(1866~1940)は、京都帝国大学教授として4年間電気工学の教鞭をとったが、職業人生の大半は草創期電気事業に関わる電気技術者としての活躍であった。大学卒業後、京都電灯初代技師長を勤め、熊本電灯、京都市電気部のほか、中部地方でも静岡電灯、名古屋電気鉄道、飛騨電灯の事業創設や電気工事に携わった。



小木虎次郎

生涯と事業

小木虎次郎は慶応2年1月、茶箱製造を営む西野甚七の長男として京都に生まれた(祖母の実家小木家を継ぐ)。明治22年7月、東京帝国大学電気工学科卒業(在学中、京都電灯・神戸電灯設立工事の実習に携わる)とともに、京都電灯の初代技師長に就任した。25年5月、熊本電灯に移り交流式発電機導入を図った。26年3月、京都市水利事業、後に同電気部に転じ、疏水事業に携わるかたわら、第4回内国勸業博覧会(明治28年)の委員等も務めた。同28年6月、電気事業調査のため渡米、翌年3月に帰国後は静岡電灯・名古屋電気鉄道の技師として電気工事の設計監督を行った。32年9月、京都帝国大学理工科大学教授となり、34年に工学博士の学位を授与されている。明治36年退官し、その後は関西電気工業商議所の経営、バグナル・エンド・ヒレス会社の囑託、私立京都工学校校長等を勤めたが、この間44年~大正2年まで社長大沢善助に請われて京都電灯技師長に再度就任し同社発展の礎を築いた。小木は学理と実地に秀で、情に厚く友誼に富んでいた。晩年は京都



創業当時の京都電灯本社・発電所

洛北に隠棲、昭和15年3月、74歳で逝去した。京都電灯副社長となった石川芳次郎は娘婿である。

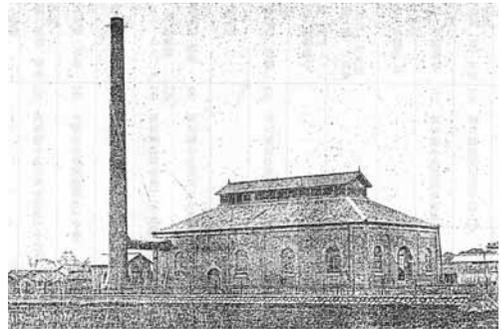
静岡電灯：業績好調の技術的基礎を築く

米国視察から戻った小木は、明治29年5月、静岡電灯(専務：磯野新蔵)の囑託を受け、宝台院境内の火力発電所(75kW)を建設など、同社創設の電気工事に携わり、30年2月に開業を見た。静岡電灯の技術的基礎は小木技師

の力によるとされ、業績も良好だったため、明治37年、浜松電灯の事業の再スタートに際し協力を求められ、砂山町の火力発電所建設等の指導にも当たった。

名古屋電気鉄道：検査官も説明を拝聴

静岡電灯と兼務して、明治29年6月、小木は名古屋電気鉄道の主任技師にも就任している。京都電灯社長の大沢善助が名古屋電気鉄道創設に関わっていたので、協力を要請されたものである。名古屋駅前の那古野町に自家用の火力発電所(200kW)を建設し、明治31年5月、名古屋駅・武平町間2.2kmに、わが国2番目の電車運転を開始させた。官庁検査では、小木の米国電気事業談に、通信省の検査官が拝聴するという風景も見られたという。

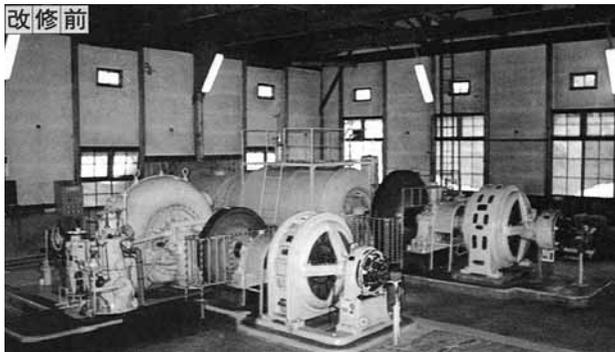


名古屋電気鉄道 那古野町発電所

飛騨電灯：小木の協力で事業創設

飛騨電灯は飛騨高山の住民平が計画・発起した事業で、明治35年8月に電気事業経営許可を得たものの、資金調達の目処が立たず事業は行き詰まっていた。住が最後に頼ったのは、京都大学教授をしていた小木であった。小木は住の熱意に打たれて、高山まで足を運び、囑託をしていたバグナル・エンド・ヒレス会社を紹介し、これによって事業が軌道に乗

った。宮川の支流小八賀川に下切発電所(75kW)が建設され、37年11月に岐阜県3番目の電気事業として飛騨電灯が開業した。小木は自ら飛騨電灯の大株主となり、専務取締役として経営を担ったが、40年3月地元で経営権を譲っている。(浅野 伸一)



下切発電所の水車発電機(改修前)



住民平と小木虎次郎(右)